

その存在すら知られていないものなのであろう。

各州でわれわれが受けた暖かい待遇には、忘れ難いものがいくつもある。多くの州では Agricultural Chemist か Soil Survey Officer が調査に同行してくれて、サンプリング地点の選定から試坑の用意、はては宿泊、食事の面倒までみてくれた。また調査用の自動車を出してくれた場合もある。こうして、すくなくともわれわれの経験した限りでは、インドの農業研究機関は外国人訪問者に対してきわめて親切であり、調査などのためには種種の便宜をはかってくれるように思えた。ところで、こうした援助を受ける側のわれわれとしては、返礼の用意をしておく必要がある。時にはセミナーの開催を要求されたりするから、あらかじめそうしたことに対する覚悟をしておくことが必要だ。研究成果のスライドなどを持参してゆくことは、もっとも賢明な方法であろう。実のところ、Bihar や Andhra Pradesh でそれを要求され、不用意なわれわれは大いに面くらった次第である。Cuttack では川口教授が立派なセミナーをやられた後であり、われわれが到着した時にはたいへんな好評をばくしていた。

再び北タイより

— ラフ・ナ語の調査 —

桂 満 希 郎

日 程

4月初めに試験が終了すると、6月中頃まで大学の夏休みとなる。この休みを利用して北部タイで仕事をするについては、ずっと前から考えていたのであるが、今度やっと2週間ばかり自由な時間が持てそうな見通しがついたので、大急ぎで旅行届を提出し、あちこちに電報を打ち、バンコクから出て行けることとなったのである。4月23日、汽車にてバンコク発、24日朝チェンマイ着、1泊して25日の飛行機でチェンラーイ着、すぐ車をやとってメーチャンまで出かけ、いちおう郡長に表敬、その日はチェンラーイにもどる。26日朝、チェンラーイ県知事に面接の後、再度ジープでメーチャンに行く。さらにニコム (Chiang Rai Hilltribe Welfare Settlement) まで約15キロに行く。ニコムの所長 (Superintendent) に面接の後、セーンチャイ村およびアルー村 (共にアカ族) に出かけ、会うべき人に会い、面接すべき人に面接をすませってから、仕事の打ち合わせをする。今回の仕事の目的、内容、方法等を説明した後、インフォーマントとして働いてくれる予定の C. Th. 氏 (ラフ・ナ族) を連れてメーサーイ

に行く。明るく27日より5月9日の夕方までの約13日間、ここに滞在して、午前、午後、時には夜と、近ごろはやりの「インテンシブ・メソッド」で仕事をする。5月9日の夕方、彼をニコムまで送りとどけてから、私はチェンラーイにもどり、1泊した後10日早朝バスで出発、同夕方チェンマイ着、明るく11日午後の飛行機でバンコク帰着という旅程である。以下、今回の旅行、調査について取り止めないことを記して「現地通信」としたい。¹⁾

チェンマイ——チェンラーイ——
ニコム——メーサーイ

4月24日、チェンマイに着くとさっそく輪タク(サムロー)をかり上げて街を見てまわることにした。私は1964年9月から1965年4月までアカ語の現地調査をやっていた際、このチェンマイを基地とし、時々もどって来ては休息していたのであるが、わずか4年前とは言え、その当時と比べるとよく変わったものだと思う。1967年11月にここへ来た時には、変わった変わったと言われながら大して変わっていないではないかという感があったのであ



写真1 チェンマイの町

1) 今回の旅行に際し、Chiang Rai Hilltribe Welfare Settlement, センチャイ村, アル一村, チャチャーランバ村に対し深く感謝する。なお、人名はすべて頭文字のみを記することに



写真2 チェンラーイの町

るが、それは私が街を見てまわることをおこたったため、今度ゆっくり見て歩いたところ、やはりチェンマイは変わったと言わざるを得ないだろう。今までに見られなかったような大きなホテル、今までにも見られたようなあまり大きくない旅館が急激に増え、それにつれてバー、ナイトクラブ、トルコ風呂(日本の名前ばかり)、売春屋が非常に多くなっている。要するに、バンコクの繁華街、特に“New Petchaburi Extension”(日本大使館が新築移転した辺)の雰囲気になんか近づいてきたと言えは当たっているであろう。今まで、北タイでフィールド調査をやる者にとってチェンマイは非常に良い休息の地となっていたが、現在あるいは将来のチェンマイは現地調査の基地としての適切さを大きく失ったと言わなければならない。これから北タイでフィールドをやる者にとって、ここに基点を置かなければならない理由は何もないであろう。チェンラーイ、メーサーイあるいはメーサリエン等がより適当な場所として取って代わりつつあると言えよう。

チェンラーイの空港は大変立派になった。私が最初にここへ来た1964年7月には未だ舗装がなく、水牛が水たまりのそばで草を食べているような滑走路であったが、同年の10月には舗装工事が始められ、12月末には立派に出来上がり、今来て見ると小さな木の掘っ建

て小屋に引き換え、3階建の鉄筋コンクリートの建物が出来ている。これは結構であるが、お定まりの通りあちこちに“U.S. Air Force”というのが目ざわりである。チェンラーイの街は以前よりよくなった。全体に小ぎれいになり、商店が増え、前よりも活気が出てきたようである。ここからメーチャンまで30キロ、そこからニコムまで15キロを行くための「足」が必要となる。4年前にはこれを行くのに、(1)途中までバスで行き残りを歩く、(2)前もってニコムに連絡しておいてジープを出してもらい、(3)チェンラーイ県庁の好意でジープを出してもらい、このいずれかしか方法がなかった。今度来てみるとタクシーがあり、貸しジープもあると言う。自分自身の「足」を持たぬ者にとって誠に有難いことであるが、これは恐ろしく高くつく。ジープの場合、自分で運転し、燃料費等を含めて、1日500バーツをみておかねばならない。距離数には関係ないが、この辺ではジープが非常に貴重であること、道路が悪いため車の損傷が大きいことなどの原因で高くなっているであろう。チェンラーイの街の北を流れるメー・コック河を越えて北へ30キロほどでメーチャンに着く。チェンラーイ県の山地民族の主なものは、主として、この河より北に住んでいる。このメー・コック河とビルマ国境とパホンヨーティン道路に囲まれた部分がいわゆる“Mae Kok Region”であるが、タイ国中でも最も面白い地域の一つと言えるであろう。この地域だけで、タイ国に住むチベット・ビルマ系民族のすべてが代表されていると言える。メーチャンからニコムまでの道はずいぶんよくなった。前回にはこの道を行くのに3時間余り掛ったことがあるが、今回はまだあまり雨が降っていないためか大した困難もなくニコムに着いた。

ニコムに着いて、前にはなかったもので、最初に目に入ったのは、おびたしい数のメ

オ族である。この辺では、メオ族というのはあまり多い種族ではなく、ニコムの中で彼らに会うことはまずなかったのであるが、100家族あまりがずらっと小屋を建てて住んでいる。「村」と言うよりは「難民収容所」の感じがする。話を聞くと、最近チェンコーン地区で共産ゲリラが激化したために、戦闘地域に当たる村が移住させられ、ここへやって来たと言う。さらに100家族ばかりが移って来る予定だと言う。近ごろナーン県タウン・チャン地区、チェンラーイ県チェンコーン、チェンカム地区をはじめとして、北タイにおけるゲリラが激化するにつれて、メオ族を筆頭に山地民族対策がタイ国政府にとって頭の痛い問題となってきているが、根本的には、タイ国政府がごく最近になるまで山地民族をまじめに取り上げることをおこたり、ほったらかしておいたということが最大の落度であろう。戦闘地域に当たった山地民族の村の移転に伴って、政府はかなりの予算を組んで彼らの便宜を計ることに努めているようだが、こういった政策も末端に至ると必ずしも計画



写真3 水を運ぶラフ族の男子

通りに進んでいないようである。²⁾ この山地民族の問題は、よほど謙虚にまじめに対処しなければ、「お上」が「人民」に対するというやり方ではうまく統治してゆくことは出来ないであろう。

ニコムから5キロ行くとセーンチャイ村に着く。この村は、北タイから東シャン州南部にかけてのアカ族の村の中でも、最も大きな村の一つであろう。タイ国でアカ族に関する調査を行なう場合、どの村をフィールドに選ぶにしても、まずセーンチャイをぬきにすることは出来ないだろう。村長はタイ国における全アカ族の長ということになっており、仕事をスムーズに進めるためには、まず彼を立ててかかる必要がある。彼の人物なり、もののやり方なりに賛成するにしろ反対するにしろ、彼および彼一族のこの辺一帯におけるインフルエンスというのは動かせぬ事実であるから、アカ族の調査をする場合、その調査が広く深くなればなるほど、この事実を無視することは出来なくなるだろう。また、セーンチャイ一族をはじめとして、この村のアカ



写真4 チェンマイの町へ出てきたメオ族

2) ราชบุรุษเมืองน่าน “ชาวเขาในภาคเหนือ” สยามรัฐ ๑๕ พ.ศ. ๒๕๑๑ および คึกฤทธิ์ ปราโมช “คึกฤทธิ์……” สยามรัฐ ๑๘ เม.ย. ๒๕๑๑

族は非常に「かしこい」者が多い。この「かしこい」と言うのはわれわれが都会で言う意味での「かしこい」であるが、この点でセーンチャイ村のアカ族は他の村のアカ族に対し一段と勝っている。この事も調査をやる際、覚えておけば何かと便利なものである。

セーンチャイ村からさらに3キロほど歩くとアルー村である。この村は4年前と比べると全然活気がなくなった。³⁾ アルーから話を聞いてみると、昨年ちょっとした意見のくいちがいから、村の長老格の1人が、徒歩で6時間ばかり入った所に新しい村を開いたと言う。その際、20家族余りが彼について新しい村に移住し、4年前には若い美人の多い華やかな村であったのが、彼女らのほとんどが移住してしまい、現在では子供とすでに妊娠した者を除くと、本当の「女」というのは1人か2人しか残っておらず、それも他に移ってゆきそうな気配を見せている。男子と女子の数がつり合わないため、圧倒的に多い男からの要求をさばき切れないというのが理由のようである。今では、歌の録音すら困難になっている。これから先どうなってゆくか、今後の見ものである。

メーチャンから北へほとんど真っすぐ35キロほどでメーサーイである。メーカムを過ぎたあたりから景色がぐっとよくなる。フオイ・カイを過ぎるとすぐメーサーイに入る。調査(滞在)場所としてメーサーイを選んだのは、ここならば町の中にもアカ族やラフ族等に会うことはわけないことであり、必要ならばいつでも彼らに接触出来るからである。タイ国最北端の町であり、ビルマのタチレイツ(Tachilek)との間にあまり大きくない河があり、その河の橋の真ん中に引かれた2本の線が公式の国境になっている。したが

3) アルー村、セーンチャイ村における調査については、私の「アカ語の現地調査から」『東南アジア研究』第3巻第3号、1966、参照。



写真5 針仕事をするアカ族の少女
(アルー村にて)

って、その辺一帯の通商なり交通なりの要所になっており、大きな立派な市場は、土地のタイ人 (Khon mǔang), シャン族, ビルマ人, 中国人, 山から来た山地民族等でにぎわっている。メーチャンは暗くなると同時にしーんとしずまるのに対し、ここは真夜中までにぎやかである。この山地民族は、アカ族、ラフ族、リス族、ヤオ族等が多く、タイ側に住む者だけでなく、時にはビルマのラーショー (Lashio) あたりから来たと言う者に会うことも出来る。その他、少数ながら、パラウン族、ワ族などがふらっと入って来ることもある。各地に点々とキャンプを持つ国民党 (KMT) の兵隊、SIA (Shan Independent Army) の連中、KIA (Kachin Independent Army) の隊員等にも会うことが出来て、色色とその辺一帯の事情を聞き取る事が出来、なかなか面白い所である。したがって、仕事の他に何もする事がない退屈さからくる精神的疲労というものが全然なく、ここを滞在場所に選んだことは非常に適切だったと思う。仕事ですんでふらっと外に出て茶などを飲んでいると実に色々な人間に会う。ある日、ビルマのワ州で生まれたと言う中国人 (KMT) の T. S. 氏に会ったところ、坐るといきなり英語で “What can I do for you, sir?” と聞かれたのでポカンとしている

と、「ビルマで何かの組織を作るのならいつでも手助けしよう。」と言う。考えてみると、彼にしてみれば、外国人くさい人間がこんな所で山地民を連れてウロウロしているということは、何かをたくらんでいるとしか思えないらしい。ただ好きで言葉などを研究しているということがどうしてもピンと来ないようである。説明しても分かりそうもないので、「いずれその時にはよろしくたのむ。」と言っておいた。

ラフ族およびラフ語

「ラフ」 /la^ˇhu-/ というのは彼らが自分自身を呼ぶ名前であって、最も正しい名称とすべきであるが、他の山地民族と同様、呼ぶ側の者によって、また色々と変わった名前がつけられている。中国人による /lǎohee/ あるいは /jiwlǎo/, 雲南省のタイ・ルー族による /khàalǎo[?]/, ビルマのシャン族、クーン (khǎən) 族、タイ人による /musəə/, などである。シャン族のある者は /méchǎo/ と、また一部のビルマ人は /musaa/ と呼ぶと言われているが、この最後の2通りの呼び方は、確かかどうかよく分からない。ラフ族自身は「ラフ・ヤー」 /la^ˇhu-ya^ˇ/《ラフ人》であり、何ラフということには関係なく、ラフ族全体から心よく受け入れられる呼び方である。

普通ラフ族と言う場合、ラフ・ナ族、ラフ・ニ族、ラフ・シ族、ラフ・シェレ族、ラフ・バラ族等を含んでいる。ラフ族全体の分布を見ると、だいたいサルウィン河とメーコーン河にはさまれた、ビルマ東北部シャン州と中国雲南省との国境あたり、すなわち北緯23度から21度の間あたりが、最も人口の多い地域になるようである。このあたりを “concentration” として、中国雲南省、北部ラオス、ビルマ東部シャン州およびカチン州の一部、北部タイ国と、四つの国家にまたがって分布し

ている。ラフ族分布の南限はタイ国ターク県のラフ・シェレ（北緯17度あたり）になるであろう。これらの広大な地域に住むラフ族の正確な人口はわからないけれども、だいたいの推定数は次の通りである。⁴⁾

中国雲南省……………	139,000人
ビルマ……………	100,000 "
タイ……………	16,000 "
ラオス……………	2,000 "
合 計……………	257,000人

これらのうち、細かい種族別の内訳はわからないが、おそらくラフ・ナとラフ・ニが大半を占めているであろう。ビルマにおけるラフのうち、60,000人くらいがラフ・ナによって占められ、次いでラフ・ニ、ラフ・シ、その他となっている。そして、全人口の中で約40,000人くらいが東シャン州でも特にチェントゥンを中心とする地域に住んでいる。タイ国におけるラフ族は、ビルマとは反対にラフ・ニが大多数を占めており、約16,000人のうち、種族別の内訳は次の通りである。

ラフ・ニ族……………	10,000人
ラフ・ナ族……………	3,000 "
ラフ・シェレ族……………	2,000 "
ラフ・シ族……………	500 "
ラフ・バラ族……………	?
合 計……………	15,500+?人

主な居住地を示すと次の通りである。かつこ内は郡 (amphoe) の名前である。⁵⁾

- 4) Gordon Young, *The Hilltribes of Northern Thailand*, Bangkok, 1962; บุญช่วย ศรีสวัสดิ์ *ชาวเขาในไทย* Bangkok, 1963; Frank M. Lebar, Gerald C. Hickey and John K. Musgrave, *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*, New Haven, 1964.
- 5) ラフ・ナに関しては村の位置までだいたいわかっているが、いつ移動するかわからないのであまり細かいことを言っても役に立たない。

- Chiang Rai (Mae Sai, Mae Chan, Chiang Khong, Mūang, Mae Suai, Wiang Pa Pao)
 Lampang (Wang Nūa)
 Chiang Mai (Fang, Chiang Dao, Mae Taeng, Phrao, Omkoi)
 Mae Hong Son (Mūang, Pai)
 Tak (Mae Sot)

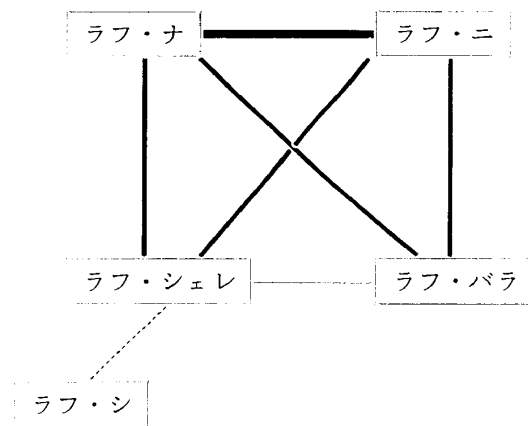
これらのタイ国のラフはすべてビルマから南下して来たもので、ラフ・ニが最も早く、150年くらい前ではなかろうか。⁶⁾ 元来ラフ・ニとラフ・ナというのは同じもので、早くから南下を始めたのがラフ・ニということになり、言語的には同じ言語の南部方言と北部方言と見たほうが当たっているかもしれない。ビルマからの南下に対して、北ラオスから北タイへ向けての西向きの移動はないようである。少なくとも、チベット・ビルマ系の民族に関する限り北ラオスから来たとか、北ラオス経由で雲南省から来たというグループにも、あるいは個人にも、まだ会ったこともないし、話を聞いたこともない。タイ国のラフ族は元来アニミストであるが、ビルマから入って来た者の中にはキリスト教に改宗した者もあり、現在約250人くらいの改宗ラフがタイ国内にいるようである。タイ国におけるラフ・ナ族はラフ・ニ族とは反対に非常に新しく、せいぜい50年くらいの歴史しかないようである。すべてビルマから入ったもので、中にはかなりはっきりと経歴のわかる村もある。例えば、フェーンにある二つの村、パーカーおよびチョロは、1957年に、チェントゥンの南部ムアンサートにあった一つの村が二つに分かれてタイ国に入ったもので、チェンダーオの二つの村、バンホエタットおよびバンチャイスックも、やはり1954年にシャン州からフェーン

6) この数字は当てにならない。タイ語に残る最も古い記録は約80年くらい前のものである。

ลัทธิธรรมนิยมต่างๆ ภาคที่ ๒๔ 参照。

の北へ入った一つの村が、チェンダーオに来てから1962年に二つに割れたものである。

ラフ語と言うのは通常ラフ・ナ語を指し、これがラフ族の間のみならず他の山地民族の間においても非常に有力な言語となっているが、タイ国では人口の関係上ラフ・ニ語を無視することは出来ない。ラフ・ナ語とラフ・ニ語との相異はわずかなもので、これに次いでラフ・バラ、ラフ・シェレ、ラフ・シという順で相異が大きくなる。ラフ・ナ語とラフ・ニ語とは何の困難もなく理解し合えるが、ラフ・ニ語とラフ・シェレ語（またはラフ・バラ語）、ラフ・ナ語とラフ・シェレ語（またはラフ・バラ語）、これらは互いに理解出来るが少し困難を伴い、ラフ・シェレ語とラフ・バラ語とは何とか理解出来る程度で、ラフ・シ語と他のラフ語とはほとんど理解し合えず、わずかにラフ・シェレ語と何とか理解し合える程度のものである。これらの関係を図にすると次のようになる。



ラフ・シ語が一番「変わっている」ということになるだろう。ただし、これらのラフ族はすべてラフ・ナ語を話すか、または解することが出来る。ラフ・ナ語というのは数多くあるチベット・ビルマ系言語の一つであるが、極めて重要な言語である。学問的にはどの言語が重要であるとかないとか優劣をつけることは出来ないかもしれないが、実用的立場か

らすれば、このラフ・ナ語はその重要さにおいて明らかに他の言語に勝るものである。シャン語・北タイ語 /khammuang/ がこの地域の平地における共通語になっているのに対し、ラフ・ナ語が高地における共通語となっている。ラフ族、アカ族、リス族はすべてラフ・ナ語を話し、理解することが出来る。またメオ族・ヤオ族の一部、中国人の少数もラフ・ナ語を使えるようである。これに対して、ラフ・ナ族で他の高地の言語を話す者は非常に少なく、シャン語、北タイ語、ビルマ語、雲南官話等の平地の言語をいくらか話す程度であろう。この地域の山地民族の調査を行なう場合、シャン語やタイ語を使うよりも、ラフ・ナ語を媒介にしたほうがずっと有利である。この辺の現地調査をする者のために、タイ語やビルマ語と共に、ラフ・ナ語のコースがあってもよさそうなのである。ラフ語、リス語、アカ語というのは互いによく似ており、彼らがラフ・ナ語を話すというのは自分の言語と同じように話すということで、シャン語やタイ語を話すのとは程度も質もちがう訳である。こういった観点から、今後この辺で現地調査をする人達はラフ・ナ語の能力を身につけておくことが非常に有利だと思う。しかも、他のチベット・ビルマ系言語、例えばアカ語やリス語に比べると、ずっと学びやすいのはありがたいことである。ラフ語、アカ語、リス語はチベット・ビルマ系の中でもいわゆるロロのグループに属するものであるが、これらに共通した特徴として次のような音韻上の特色をあげることが出来る。すなわち、いずれも、 $C_1 C_2 V C_3$ といった簡単な音節構造で、 C_2 および C_3 は極めて限られた数の半母音、鼻音、声門閉鎖音等である。単純な開音節が圧倒的な数を占め、最低三つから五つあるいは六つに至る声調類があり、register system あるいはこれと contour system との結合した声調を有する。また、

“m, ɣ, m̩”といった syllabic consonants が見られる。こういったところであるが、ラフ・ナ語もこの例にもれるものではない。具体的にどのような特徴を呈しているかは、別の所で記したい。

調査・研究

インフォーマントの C. Th. 氏は、1944年、ティディム・チン族を父に、ラフ・ナ族を母に、ビルマ西部のティディムに生まれた。ティディムを出てカチン州のミッチナーで子供時代をすごし、さらにチェントウンにやって来て、バプティストのミッション学校に入ったが、最後には SIA に加わり、30名ばかりの兵を率いてビルマ政府軍に対するゲリラを行ない1965年11月タイ国に入り、1967年には SIA より脱隊、3カ月ほどフェーンのタートン北部にあるクリスチャンのラフ・ナの村に住んだのち、ヒンテークの南西8キロほどのチャ・チャー・ランバー村(ラフ・ニ族)に住むようになり現在に至っている。ラフ・ナ語の他にティディム・チン語、カチン(ジンポー)語、ビルマ語、それに若干のシャン語と雲南官話とを話す。この経歴からみても分かる通り、彼のラフ・ナ語が果たして真のラフ・ナ語を代表するものであるかどうか不安であったが、幸いにして、他のラフ・ナ族に当たってたしかめてみたところ完全に一致し、この点では心配のいらぬことがわかった。彼はすべての点で申し分ないインフォーマントで、頭はよくこちらが何を知りたかということを理解する能力は大したもので、仕事をたのんだ場合にも、バンコクの大学生のほとんどの者よりもよりのたよりのことがわかった。

今回は仕事の時間が極めて限られているので、長期調査と同じ方法で仕事をして望み通りの成果は得られないので綿密な準備をし、クエスチョネアールを作った上で現地に出かけ

た。調査を手っ取り早く進めるには、すでに存在する文献を調べ利用するのが賢い方法である。ラフ・ナ語については、ビルマにおいてローマ字による正書法がキリスト教のミッションナリーによって定められており、これの読める者も相当数になるようである。⁷⁾ この正書法は J. H. Telford, *Handbook of Lahu Language*, Rangoon, 1938. に詳しく説明されており、後に多少改変されたが根本的にはこの Handbook と変わりがない。私はこの Handbook を利用し、次のようなリストを作成した。すなわち、(1)音素を見つけ出すため各文字別に分類した単語のリスト、(2)声調類を把握するための“Minimal pairs”(e.g. nã, na-, na, na-, na-, na-, na-, na-, etc.) ばかりのリスト、(3)大多数のものからみて異常な綴字法を持った単語のリスト、この3種のリストを作っておいたので、だいたい6時間(1日)で終了することが出来、この言語の音素および声調類をつかむことが出来た。このような行ない方はいわば邪道になるだろうが、文字法から来る先入感によって実際の言語をゆがめて理解することさえなければ、すでにある文献をうまく使って手っ取り早く初期の段階をすませってしまったほうが賢明である。これにより言語の音素体系とその音素体系と綴字との対応関係が分かるのである。⁸⁾ その次に、同 Handbook に現われた文をすべて取り出し、私が読み上げてゆき、実際にそのように言うかどうか、また文法的に正しいかどうかを確かめていった。この結果、文章全部の約5パーセントは文法的に正しく、理解出来るが実際にはそのようには言わない文、あるいは

7) 現在ビルマには約 3,635 人の改宗ラフがおり(前掲 Lebar *et al.* 参照)、彼らのほとんどがこの正書法を理解しているようである。

8) これについては別の所で詳しく説明したい。この綴字法は長く用いられてきたもので宗教とは切りはなしても、知っておればいろいろと便利なものである。

ラフ・ナ語ではなくラフ・シ語の言いまわしであるような文であることが分かった。これを終えると、いちおうこの本からはなれて、基本語彙および文章を取ってゆくことになる。今回はだいたい 1,500語・200文ばかりを取ることが出来た。思ったより早く仕事を進めることが出来、以上の外に、物語を二つ、歌を一つ録音し、これをインフォーマントと2人で1語1語 transcribe してゆく。私は、この方法の逆の方法——すなわち、先に何かを書かせておいてからそれを読ませて録音する方法——は取るべきではないと思う。読むのと話すのとは同じようにはゆかないから、めんどくさくても、あまり流暢に話せなくても、まず勝手に話させて、それを後から書き取ってゆくべきであろう。そうしなければ、ストレス、リズム、イントネーションなど、本当に自然な言語の特徴をつかみ取ることは出来ないだろう。さらに、3人のラフ・ナ族による半時間ばかりの自由な会話を取り、後で聞きながら書き取ってゆくわけであるが、これには9時間くらい使わなければならない。ベッドの下にテープレコーダーをかくしておいて、話が熱してきたところにスイッチを入れるのであるが、“native speakers”が何の手加減もなく自由勝手にしゃべる言語というのは聞き取るだけでも大変な仕事である。わずか30分の会話からでも、質問—応答の方法では得られないような大切な資料が得られるものである。言語を調査する際、最初は bilingual な質問—応答の方法で出発し、最後は完全に monolingual な方法で participate しながら調査を進めるという段階に至るべきであろうが、この両者の間のどの辺まで進むかということは、主として調査期間によって左右されるであろう。しかし、monolingual または bilingual ということにかかわらず、質問—応答の方法は出来るだけ早くやめたほうが良いと私は思う。この方法のみによって得

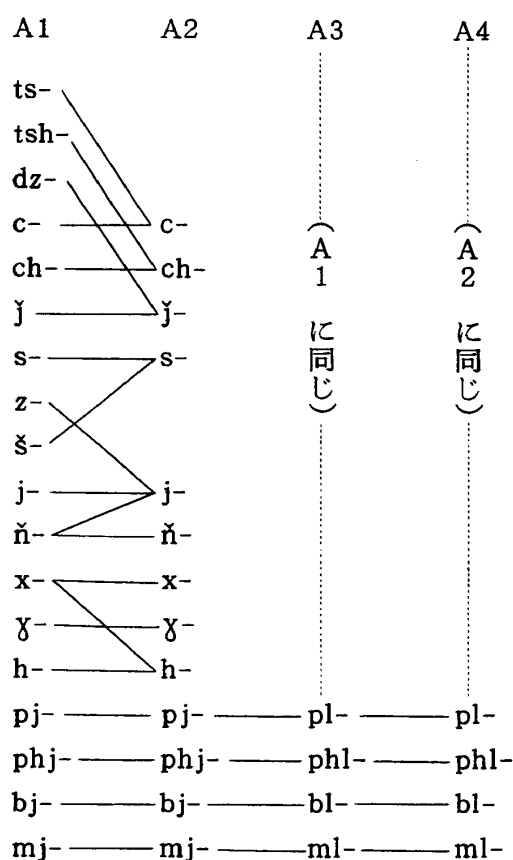
られる資料というのは、量的にも質的にも、たかがしれたものである。語彙ならばせいぜい1,500語、文にして500文くらいが限度であろう。私は普通のリストを使っての聞き取りというのは、せいぜい1,000語、だいたいの音素体系が分かるくらいで充分だと思う。音素体系が分かればだいたいの表記法を定めることが出来るから、ここから先は出来るだけ生の言語を取ってゆくようにすべきである。一つの手っ取り早い方法として、何でもよいから自然な言葉を録音してしまっただけで、それを後からインフォーマントの助けによって書き取ってゆく方法である。これが最高の方法だとは言わないが、少なくとも、「……を何と言うか?」「……と～とどちらがうのか?」というような質問—応答の方法を何週間も続けているよりはましであろう。私の今回の仕事は全体で正味50時間程度の短いものであったが予期した以上にうまく進めることが出来て喜んでいる。

アカ語について

今回の旅行中にアカ語について面白い点に気がついたので一つの information として記しておく。”私が前回に調査したアカ語の一つ(A1とする)は、もう一つのアカ語(A2)と音素体系を異にする。私はこの相異は村による方言の相異であると思いS村方言およびA村方言としたのである。しかし、今度アカ族の村を再度訪れて色々と活動してみた結果、同一の村内でA1とA2の両者ともを発見することが出来ることがわかった。ただし、この事実からA1とA2とを互いに“free variants”とするのは誤っている。A1の体系を持つ話し手は常にA1を話し、A2は常にA2であり、同一村内に居住しているけれども、

9) アカ語の音素体系については、私の「アカ語アルー村方言の音素」『東南アジア研究』第4巻第1号、1966、参照。

両者が自由勝手に入り混じることはないからである。さらに、前回の調査中には発見することが出来なかったもので、A1 および A2 の /pj-, phj-, bj-, mj-/ に対応する /pl-, phl-, bl-, ml-/ を有するアカ語のあることが、今回の旅行で判明した。これを勘定に入れると下図の対応図のごとく、全部で四つのアカ語を数えることが出来る。¹⁰⁾



このような相異した複数個の体系が一つの村の中で併存しているのである。したがって、私が最初に村による方言差としたのは妥当ではなく、アカ族の色々なグループ¹¹⁾による言語の相異と考えるべきものであろう。色々なグループが方々から寄り集まって来て村を構成するため、村の中に複数個の音素体系が存在するというのが最も事実に忠実な理解の仕方であろう。¹²⁾ アカ族は、通常ただアカ族と

いうだけで下位区分による名前はないけれども、実際には、その中には極めて多数の下位区分があり、それぞれ少しずつ異なった言語を有すると考えられる。その中でへだたりの大きいもの間の差異は、例えばラフ・ナ語とラフ・シ語との差異よりも大きいかもしれない。このアカ族の下位区分と言語との関係を明らかにするためには、村の中に住み込んで、各人の経歴・相互関係を調べ、言語とつき合わせて、グループに分けてゆく必要がある。最低数カ月あれば、グループと言語との関係のだいたいを握むことが出来るであろう。もちろん、調査期間は長ければ長いほどよく、また相手にする人間なり村なりは多いほどよいに決まっている。私は、いつか、もし他人が先にやらなければ、タイ国のアカ族について、徹底的にやろうと思っている。近年、多くの研究者がアカ語の重要性を認めだしたためか、ここ4年間に約7人(アメリカ4人;日本2人;ドイツ1人)がアカ語の調査をやったようだ。これらの調査結果が発表されるころには、非常な controversy をかもし出すものと予想される。その原因は、主として、色々なアカ語とそのグループをどう処理するかということであろう。

(1968年5月25日、バンコクにて)

- 10) これは私が短期間に記録することが出来たもののみで実際はもっと多いだろう。またいろいろなグループが集まって村を作っている場合、その言語も次第に同一化してくるだろうが、今のところ、言葉の同一化が人の動きに追いつかないといったところであろう。
- 11) *Gazetteer of Upper Burma and Shan States*, Vol. I, Pt. 1, Rangoon, 1900 には全部で十数個のクランが挙げられている。ここではクランと呼ぶべきものなのかどうか、分からないので仮にグループと言っておく。
- 12) どのグループがどのような言語を話し、またタイ国ではどのグループが多数を占めるのか、という事柄は、現在、全然知られていないが、今後のおもしろい課題になるだろう。